
鍛冶屋の娘

美雁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鍛冶屋の娘

【Nコード】

N3024L

【作者名】

美雁

【あらすじ】

とある村に彼女はいた。名前は華音。父は村長で母は村一番の美人。容姿端麗で、強く優しい。そして同時に不思議な力をその身に宿していた。

彼女には親友がいた。名前はつばめ。父は鍛冶屋で母は知らない。自身は万屋と銘打つ大層やる気のない女性だ。

そうして、彼女は――そう、つばめは否応無く華音の付添人になった。

第零話 父と話した日

ぎし、そんなありふれた音がつばめの背後から聞こえた。

つばめは振り返る事はしなかったし、相手もそれを咎める事はない。手元には細く長い竹があつて、何をしようというのかも一方の手には小刀が握られていた。

不意に小刀が閃いた。

ざく、ざつ

竹を削るそんな音に続いてつばめの斜め後ろに衣擦れの音。

彼女はなお、手を止めなかった。

「――……昔はな、」

聞き慣れた老人の声につばめは顔も声も上げなかった。

ああ、昔話が始まる。

「妖あやかなんぞいなかった」

「へえ、そりゃ良い事じゃない」

「まあな。……だが今はどうだ？ 山や森に妖がいるのは至極当たり前。それどころか最近じゃ村にまで出るようじゃねえか」

「らしいね、この村には華音かのんがいるから襲われないけど」

「なぜこのご時世にいきなり妖が現れたんだと思う？」

「さあ。いち村人の知るところじゃないよ」

「確かに。世間一般には“戦が増えたから”だと言われているらしいぞ。真偽の程は解らんがな」

「そうなの」

「だがな、俺は違うと思う」

「へえ。それじゃ何で？」

「人間が持つちやいけねえ力を持って、忘れちやいけねえ力を忘れ

たからさ」

「力？」

「そうだ。最近、刀に異形の力をつけようって動きがあるのは知ってるな？」

「うん。領主さんが推奨してるんだよね」

「ああ。お陰でこちらら商売上がったりさ。……あの力はな、人間がおいそれと手を出して良いもんじゃねえんだよ」

「ふうん……」

「いわば神の、創造主の力を無理やり人様が引きずり出してきたのさ。自然の力を人工物に明け渡すって言うのはそれほどまでに愚かな事なんだ。だから怒ってんだろ、神様って奴がさ」

「へー……じゃあ、忘れちゃいけない力って？」

「そりゃあれだ、解るだろ？」

「解らん」

「あー……俗に絆の奇跡とか、想いの力とか言われるもんだが」

「……似合わない」

「言うと思ったよ、この馬鹿娘。……簡単に言ったら、あれだ。火事場の馬鹿力」

「ああ、なるほどね」

それならさあ、彼女はようやくと顔を上げて不器用に笑った。

「その火事場の何とやらで病^{それ}、治してよ」

「無理だな」

あっそう、つばめは呟いて小刀を握りなおした。
人間に出来ることなんて限られてる。

その手に余る願い事なんて所詮叶^{さぐれ}わぬ望みにしかない。

「……父さんはさ」

「あん？」

「幸せだった？」

「……は、だった、なんて殊勝な事だな。今だって幸せだよ。馬鹿な娘がいるからな」
「そう」

男が息を引き取る、数日前の話だ。

第零話 父と話した日（後書き）

2011・07・30 ルビ削除、変更

第一話 何もかもが始まりの日

この村は名を真古村まふるむらという。

日ノ本の国の北、村は冬になると雪に閉ざされる。

辺鄙へんぴな場所にあるが、その割には人が多く笑顔が絶えない。

——その中心には必ず、と言って良いほど彼女がいた。

「華音？」
かのん

「あ、おっそいよーつばめ！」

「これでも急いできたっての」

そう、この私、つばめ……ではなく私の親友の華音である。

容姿端麗、天真爛漫、更にそういう雰囲気を持っているのか男には十中八九好かれる。

村の若い男たちに彼女を好かない人間はいない。

……とは言えこの村に年頃の女性は私たち含め二人。

つまり、私と華音しかないのだ。

そのうち私は女性らしい仕草も言動もしない上顔立ちは平凡。

年頃の男女がいると恋だの何だのと煩くなるという話が正しければこうなるのは自明の理、火を見るよりも明らかだ。

そんな女性の親友である私には、恋の相談やら八つ当たりやら面倒事もやたら多い。

何かと面倒な立ち位置だと思う事は少なくないけれど、こうも多いと逆に笑いたくなる。

「ふふ、解ってるよ！　ね、薬草摘み手伝ってくれない？」

「あー……御依頼なら承りますよ、お嬢さん」

「面倒臭がりな悪い癖だよ」

がりがりと頭を搔く。

面倒臭がりなのは解ってるが必要以上の――つまり仕事以外の事を
する気になれないのは悪い事だろうか。

……悪い事ですネ。

ふあ、と欠伸を漏らすと彼女はあ、と声を上げた。

籠かごを担いで近くまでやってきた彼女を見ると、華音はぎゅ、と私の
服を引っ張った。

「？ な、」

「まあ袴なんて穿いてー！ 着飾ったら可愛いのに！」

「……あんたに言われても嫌味にしか聞こえないよ」

思わず額を押さえる。

着飾りたくなんかないんだから外見については放っておけば良いの
に。

因みにこの袴はもともと父の物で、動きやすいから多用させてもら
っている。

この子は私がこれを着ているのを見てはこうやって口を尖らせる。
大体、こんな村の中で泥まみれになって働くのに着飾ってどうする
んだ。

ふうと溜め息を吐いて彼女の背の籠を奪い取った。

あ、という声を聞かなかった事にして近くの森への道を見る。

今日は晴れているけど、一応響利きようせつを持ってきて正解だったようだ。

森の中には妖あやかしがいらないなんて誰も言わない。

「今日しんたんも深潭の森？」

「そ、そうだけど……！ つばめ返してよー！」

「私はほとんど薬草なんて見分けられないんだから私が持った方が
効率良い」

違う？　と言つて首を傾げる私だけど勿論本音はそこにはない。

この子に籠を持たせると男どもが煩いのだ。

お前ら……まさか箸も持てない年頃じゃあるまいし、とは思ふものの反論するのも面倒だ。

依頼だと思えば（こんな依頼は十中八九有り得ないが）何とかなる。

——依頼、というのも私はこの村で万屋を営んでいるのだ。

鍛冶屋だった父に似てなのか、会った記憶もない母に似てなのか、私は割と手先が器用だ。

細かい物や小屋の修理、その他失せもの探しなどなど。

時折、華音の親父さんである村長から山賊討伐の依頼が来ると竹光の響利を持って東の深潭の森や北の樂楼らくろうの森へ行く。

……最近では妖討伐もあるのだから憂鬱なものだ。

「もう……疲れたら言つてね？　代わりばんこに持とう？」

「疲れたらね」

さく、

草鞋ぞうりに踏まれて草が音を上げるのを聞いた。

ああ、嫌な予感がする。

ふと空を仰いだ。

嫌味なまでに晴れ渡った空に、ひゆるりらと鳶とんびが舞った。

十

深潭とは深い淵を意味していて深淵とほぼ同意義だ。

由来としては、神の怒りに触れた男がこの森の谷に落ちて不老不死になつてしまうという神話が一説にあるらしいが、如何せんこの森にそんな谷はどこにもない。

私は父が深潭の森と呼んだからそう呼んでいるし父も誰かに聞いたからそう呼んでいるんだろう。詳しいことは誰にも解らない。

「……ねえ、つばめ」

ぼんやりと思考に沈みながらヨモギを摘んでいると不意に華音が呟くように私を呼んだ。

はいはい、面倒事ですか。

腰に佩^はいている竹光を確認してから華音へ視線を向ける。

「なに、疲れたんなら帰ろうか」

「違うって！ ……何かさ、聞こえない？」

耳の後ろに手をやって耳を澄ます華音。

……生憎だが私は耳が良くない。

だけどその表情からあまり楽しい音ではないと解った。

そして、良くも悪くも好奇心旺盛な彼女のこの後とる行動は解りきっている。

「あっち、かなあ……？」

ほら来た。

ふらふらと歩き出すその姿に小さく溜め息を吐いて、最後に一枚ヨモギを採る。

薬草摘みはここいらで終わりか。

私の勘もよく当たる、良い事だ。

「聞こえるって何が？」

「——悲鳴、みたいな……声……？」

華音の後を追いながら問いかけると首を傾げながら要領を得ない答えが返ってきた。
変な話だ。

華音が悲鳴を聞いて走り出さないなんて。

怪訝に思っただけ彼女を見ていると、予備動作もなくその足が止まった。

「！　い、今！　聞こえた……誰っ!？」

きよろ、と華音が辺りを見渡す。

……声なんて聞こえないけど……、まさか幽霊とか精霊とかと心通わせるようになったのか？

華音の事だから有り得ない話じゃない。

彼女はあちこちに向けていた目を地面に落とし、“声”に聞き入っていた。

ふと既視感を覚えて過去を辿る。

——ああ、数年前にもこんな事があった。

その時に彼女は“守る力”を手に入れて、代わりに彼女の一部を失った。

望まない力にも代償はあるらしいと知ったのはその時だ。

「助けてって……どういう意味……!？　ちょっと待ってよ、ミコって何の事!？」

黙って彼女の様子を眺める。

本日は晴天なり。

風が気持ち良い。

葉のさざめきに耳を寄せていると、がさがさと草の波を掻き分けて歩く音が聞こえた。

人か、しかし華音は気付かない。

「――華音、」

「つ、つばめ！ 何でそんな平然としてるの！？ 今、私……神に愛される子って……！」

「華音」

「な、なに……？」

私が宥めるように名前を呼ぶと、彼女はやっと私に目を合わせた。まだ戸惑うように揺れている瞳を見て、そっと口を開く。

「人だよ、妖に追われてる」

「！」

見計らったかのように近くの茂みから人が飛び出てきた。

髪は薄い栗色で、ひとつに括れるくらいには長い。

男性にしては甘やかで整った顔をしているが、真古村の住人ではないだろう。

年頃で整った顔の男性なんて聞いたことがないし、何よりあの小さな村では皆が知り合いなのだから、見覚えのない顔だということは十中八九外から来た人だ。

それに、とぎっと観察するように視線を動かす。

履いている袴は私たちみたいで淡色じゃなくて鮮やかだ。

それに凝った装飾のついた刀も左腰に差している。

ということはそれなりに地位の高い人間だろうと見る。

ぶらりと垂れた右腕は折れているのか、少なくとも今すぐに動きそうではない。

利き腕が使えなければ真剣を持っても意味がない。

――しかしここいらでそこまでやる妖っていうと……。

「！ ……ッ人が……、逃げてください！」

「で、できません、そんなこと！ 妖に追われているんでしょう！？」

素早く駆け寄った華音は持っていた手拭いで彼の顔や腕の傷を拭いている。

華音の造形を認識して、男の顔が赤くなった。

後から聞いたところによるとそれを見た華音は傷が熱を持っているのだと勘違いしていたらしい。

素晴らしい鈍感。

だが、これを見たら誰でも思うものだ。

——惚れたな、ありや、と。

呆れながら思っ、二人を背に立つ。

この森には化け狐やら化け狸……俗に言う狐狸こりの類が出るが、滅多に被害はない。

腕を折ったり、傷を作らせたりできる妖っていうと数が限られるのだ。

「……華音、鎌鼬かまいたちか」

「十中八九ね……！ 来てるよ、つばめ！」

彼女が叫ぶと同時に、また茂みが揺れた。

「キィィィ……ッ！」

「キウウ！！！」

「（——あれ？）」

第一話 何もかもの始まりの日（後書き）

2011・07・30 ルビ削除、変更／華音・つばめの台詞、一部変更

第二話 続・何もかもが始まりの日

鎌鼬——イタチの姿をした妖あやかしである。

甲斐、信州、越後などを境にそれより北に多く生息する。山間部に現れ、彼らと遭遇した者は血の出ない傷を負う。傷の大きさは様々だが痛まないことが特徴。

咄嗟に背負っていた籠を放り投げ、低く伏せる。頭上を風を切る音が通り抜けたのに背筋が凍った。四つん這いのまま四肢で地を蹴って左に飛び退く。轟音が響いて地面が抉れた。

「キィイ……！」

砂埃の中から飛び出てきたのは一尺（30.3cm）ほどの大きさのイタチ。

その両腕は身の丈ほどの大きさの鎌でできていた。ふわりと風が舞ってその横にもう一匹が現れた。隣の動物と比べると半分かそれより少し大きいかわいらしいイタチである。

しかしその手には槌つちが当然のように付属している。地を抉えぐったのはこの小さな妖だろう。

「つばめ!？」

「平気！」

短く答えて響刹きょうせつを腰から抜き取る。
がきん！

振りかぶられた大きな鎌を響利で弾く。

刹那、耳の横を風が唸った。

後方で聞こえる破壊音に辛くも命を得たことに気付く。

……生身の人間が何の細工もない竹光で我を忘れた妖に向かうのって自殺行為かもしれない。

今更ながらに心中で舌打ちをこぼす。

そりゃ依頼で妖討伐なんて幾度となくあったけれどその時には事前に対策を立てて慎重に慎重を重ねてやつと森に来る。

大体、討伐とは銘打ってるもののあれは牽制に近い。

実際私は妖を殺した事なんてないし、勝負が見えた時点で妖たちはさっさととんずらする。

負けた者は勝った者に従う、妖の世界は単純だ。

だから基本的にこの真古村の近辺では妖による人死にはでない。

狐狸の悪戯とか一ヶ月に一回野菜が少し減つてるとかその程度のものは放っておいているからなのかもしれない。

そしてこの鎌鼬も、足を斬りつける事はあるが絶対に痛まないのだから人間は放っている。

「キウ……！」

「キィイ！」

ぎらぎらと光るその目は赤い、警戒色だ。

強いて言うなら華音と親友だからと言って方向の間違った嫉妬を私刑で発散しようとして逆に私に伸された男の目というか……。

……例えが悪いな。

簡潔に言ったら、激怒している目、だ。

何に怒っているのか、私には解らないが――。

「つばめっ、ここ任せても良いっ？」

華音は解るだろう。

鋭く尖ったような彼女の声に私はほっと息を吐いた。

華音がそう言うってことは何が原因なのか、どうすればこの騒動を収拾できるのが解ってるって事だ。

優秀な親友をもって私は嬉しいよ。

構えていた響刹を握りなおして、私は見えないだろうけれど頷きを返した。

「任せな」

「ちよっ……！ 私も残って……」

「つばめの邪魔になります！ 一緒に来てください！」

「……っ、解りました」

例の男性の声に華音がさっぱりと切って返した。

……否、まあその人持つてるの真剣だし間違っちゃいないんだけどさ。

ぞわりと小さく身震いをする。

ああ、嫉妬の類は妖より恐いんですが。

砂埃の向こうで彼が私を睨み付けているような気がして思わず冷汗。汗。

響刹を低く持ち直すと風の唸る音。

「ッ、いやいや……そりゃさ、妖達あんたらが華音あのかに手エ出せないのは知ってるけどさ……！」

「ギィィィー！！」

「あっちにや目も向けないってどういう事ですかっの……！」

きん、と鎌を弾いて体を前に倒す。

上手く衝突した二匹がもんどりうって倒れるのを眼前に捕らえて駆け出す。

大きい方に一閃。

竹光だから勿論切り傷はつかない。

視界の端に映った槌を体を捻って避ける。

地面に手をついてもう片方で小さい方を叩き付けた。

どうやらあの男性だけを狙った訳ではないらしい。

人という生物に対しての怒りなのか、それともただの八つ当たりか。どちらにしろ私の今の状況がかなり切羽詰まっていることは紛れもない事実である。

+

「あの……！」

「はい？」

「大丈夫なんですか、あの人は……！」

目の前を走る小さな背中に投げかける。

この近隣の村の人なのかもしれないが、颯爽と走るその姿は凛として美しい。

ちらりと私にその視線が移る。

ほんの一瞬かち合ったそれに体が熱くなった。

しかし彼女はすぐに前を向いてしまう。

「大丈夫なんかじゃありません！」

「……………は」

「だから、こうして走ってるんじゃないですか……！」

という事はこの方向は村に向かう道なのだろうか。

村にはあの妖を倒せる猛者ひもがいるということなのだろう。それにしても川から離れていつているようだけれど……。

思いながら走っていると不意に彼女が何事か呟いた。

聞き取れずに更に耳を澄ますと、彼女は向かって右——北東に視線を移す。

「……あっちね、ありがとう……！」

「——（何かと…話している……？）」

すぐさま方向転換をした彼女に慌てて付いていく。

はて、この様子では村に向かっているのではないようだが。

——それにしても綺麗な人だ。

走る度に左右に揺れる髪は艶やかなまでに美しい。

その顔かんばせも息を忘れるほどに凜としていて神秘的だ。

声は甘やかでそれが私だけに向けば良いと思うほどに惹き込まれてしまった。

女性に現うつを抜かすなど、私に限っては有り得ないと思っていたが彼女の前ではそれもかなわないらしい。

彼女の背を見つめながら思っていると、不意に彼女が信頼の眼差しを向けた人が思い浮かんだ。

顔は至って普通、長めの髪を頭上で結び、庇うように私たちの前に立った彼は一体何者なのだろう。

動きはかなり良かった。

“あの戦闘狂”にも勝るとも劣らないだろうその実力はこんな辺鄙へんぴな村にあって然るものではない。

ただ、竹光を使っていた事は気にかかる。

真剣を持てば向かうところ敵なしだろうに、どうしてあんな玩具おもちゃを使うのだろう。

しかし私の目の前を走る彼女の、全幅の信頼が彼に向けられていた。

彼に実力があつたにしても竹光では勝ち目など欠片もないのはどんなに戦いに縁遠い人間であつても解る筈なのに。

そう、それなら例え怪我をしているとは言え、真剣を持つ私に軍配があがる。

——真剣かそうでないかの違いをふいにするだけの信頼が二人の間にはあるという事か。

ずくりと胸が音を立てたようだった。

醜い黒の塊が私の頭を痺れさせる。

それを抑えるように手を握り締めて、思わず小さく笑う。

この感情は知っていた。

厄介なものに囚われてしまったものだと言ふ今更ながらに思う。

ふと、何かを見つけたらしい彼女が徐々に速度を緩める。

そのすらりと細い足が一本の木に近づいて、止まった。

「ああ……動けなくなっちゃったんだね」

笑みさえも含んで聞こえる言葉はどこか慈愛を持っていた。

仄かに笑い、しゃがむ彼女の上からその手元を覗き込んだ。

ふわりとした短い毛が見える。

動物、だろうか。

この緊急事態に？

更に首を伸ばして見た先には見覚えのある小さな肢体が転がっていた。

「!? ……ッそれは、鎌鼬じゃないですか……!」

「きー……」

「暴れないで」

よく見ると、鎌鼬は木の根に足を引っ掛けていて動けないのか、ばたばたと腕を上下させていた。

その足に手をかけようとする彼女に思わず声を荒げる。

「ちょ、何を考えているんですか！？ その妖は……」

「この、か弱い妖が一体なんだと言うんです。この子がいなければ……あの鎌鼬は止まりません」

言葉の意味は解らないがどこか厳かにその声は響いた。

この人は……何に対してもこんな風に接するのだろうか。

惚れた弱みか、はたまた気圧された所為か、言葉を発せない私を尻目に彼女は木の根を持ち上げようと力を入れた。

ぷつりとその手に棘が刺さる。

——……見てられない。

「……私がやりましょう」

「え？ でもあなた、怪我をして……」

「大した怪我ではありません。……大丈夫ですから、ね？」

小首をかしげて笑うと彼女は一瞬戸惑ってから横に避けた。

地面に膝を着いて、片手で押し上げると先ほどよりも大きく木の根が歪んだ。

「きい！」

「——あ」

ぴょん、と跳ねるように木の根から開放された鎌鼬は風をまとって宙に浮いた。

彼女が安堵の溜め息を吐いて、そっと笑みを零した。

思わずその表情に囚われて目を離せなくなる。

「ありがとう……」

「ッ……！　い、いえ……」

柔らかに細められた目が私を捉えて、甘やかな声色が取り払えないほどの熱となって体を蝕んだ。

……自分のことながら呆れる。

ふわりと、風を使役した鎌鼬が私に触れたのには、気付かなかった。

第二話 続・何もかもの始まりの日（後書き）

2011・07・30 ルビ削除・変更

第三話 続々・何もかもが始まりの日

は、と大きく息を吐く。

肩で息をしながら、響刹きょうせつを構えた。

今更ではあるが、風の使役者を相手にしようなんて流石に無謀だったかな、とは思わないでもない。

「キィイ！」

振りかぶられた槌つちを数歩後ろに下がって躲して、時間差でやってきた刃を響刹で受け止める。

残念ながら腕力はそこまでないので、競り合う前に刃先を右に向けて受け流す。

上手く受けきれなかった刃が右頬に掠った。

さっきからずっとこの調子だ。

村の雑用もとい万屋をやっているおかげか、体力は人並み以上と自負しているが、それでも人外と体力比べは頂けない。

つっと額から顎に伝った汗と右頬を伝う血を拭うこともできず、私は飛び込んできた二匹に視線を向けた。

——華音かのん、頼むから早くしてくれよ……！

思った、その直後ふ、と遠くの方から風の唸る音が聞こえて、生温い何かが頬に触れた。

丁度傷のついた右頬を撫でるように触れたそれは、痛みを感じさせることもなく風を伴って離れていった。

「……おお？」

悪意の感じられないそれに思わず間抜けな声が出た。
それとほぼ同時に柔らかな動物の鳴き声が近くから聞こえた。

「きい」

小さい方の腕が槌のイタチよりも更に小さめの妖が、私の腰辺りあやかしで
ふわふわと浮いていた。

その手は刷毛はけのようになっていて、蜂蜜のようにとろりとしたもの
がついている。

鎌鼬というのはそもそも三匹の妖だ。

両親と子供だったり、兄弟だったりするものの、三匹は絆が深い。
初めに彼らを見たときの違和感は二匹しかいないことへの不審だっ
た。

ずっと右頬に触れれば、垂れていた血は残っているものの痛みも傷
自体もなくなっていた。

きゅいきゅいと鳴いている目の前の妖がその手の葉を塗ったのだろ
う。

ふと気付けば先程まで激怒していた二匹の鎌鼬も小さな妖を見てそ
わそわとしているように見えた。

襲われる心配は、もうなさそうだ。

思わず、口から安堵の溜め息が零れた。

「つーばめー！」

残っていた血を拭って響刹を腰に戻すと、二人の走る音と華音の声
が聞こえてきた。

そちらに耳を傾けつつ、鎌鼬を見やると一番小さな刷毛の鎌鼬が残

りの二匹の前で拗ねたように顔を背けていた。

……拗ねているのではなく怒っているのかもしれない。

慌てたように鳴く他の二匹に小さな妖は更につんと顎を逸らした。

「つばめっ、大丈夫!？」

「ああ、華音……平気だよ。お疲れ様」

お互いに、と心配そうな顔をした華音に苦笑すると彼女も困ったように微笑んだ。

その視線はじゃれるように小さな妖に絡んでいる二匹に向いていて、私も思わず笑ってしまった。

あれじゃ親子とか兄弟っていうよりもつれない女の子に纏わりつく冴えない男みたいじゃないだろうか。

「えっと、怪我はない？」

「ない」

着物は所々小さな傷があったり、礫ひしりが当たって打撲ひづりになっているところもあるだろうが、見える位置に怪我はしていない。

それにどこか痛いという訳でもないからそう言っていると華音はほっとして息を吐いていた。

「……取り敢えず丸く収まったようだし、村に戻ろうか」

「うん、小三郎こさぶろうさんもそれで良いですか？」

散らばった葉草を籠かごに戻しながら華音に言えば、彼女は後ろに立つ男性にそう声をかけた。

小三郎、というらしい彼は少し微笑んで頷き返す。

状況が落ち着いたところで彼を観察してみようと思う。

下せば背中の中ほどまでになるであろう栗色の髪をうなじの辺りで一つに括っている。

頬にかかる程度の前髪はやや左寄りで分けられていて、鬱陶しくないのか少し気になる。

右目には片眼鏡――外つ国ではモノクルと言うものだったはずだ――をかけて、常に微笑を浮かべている優男、という風体だ。

目は薄い茶色で垂れ目、甘やかな雰囲気ですぐに男にしては背が低め。

だからと言って力がないわけではなさそうだが。

首には守り石の付いた念珠のようなもの。

大きめの水晶が五つほどついている他は小さな玉ばかりだが、かなりの値打ちものだろうと思われる。

こんな物を持っているという事は神職にでも就いているのだろうか。それにしても刀を持っているしあべこべな気もするが。

着物は綺麗な藍と濃紺などで、こちらもかなり高価なものだろう。

狩り衣を半袖に切ったような上着に、肘の辺りから広がるように袖を覆う着物。

左腰に佩いた刀は業物だろうとは思いますが、あまり良い感じは受けなかった。

最初の印象に変わらず、国に仕えている人間だろうと予想はつく。

パツと見た感じ儚げ美人風だが、腹に一物ありそうな策士型といった感じだろう。

ふと彼から目を離して妖達を見やると小さな彼も機嫌を直したのか

二人の周りをふわふわと飛び回っていた。

彼らを見る華音の目は優しい。

「――帰ろっか、つばめ」

「ん」

促す彼女に頷いて妖達に背を向ける。

後ろで華音が笑いを含んだ声でもう迷子になっちゃ駄目だよ、と言ったのが聞こえた。

ふと空を仰ぐ。

木の葉に遮られた日光がきらきらと輝くのが見えた。

今日も麗しい天気だ。

十

あの鎌鼬たちは深潭しんたんの森に棲んでいる妖で、体格を見れば恐らく両親と子供なのだろうと華音は言った。

父親は草鎌の、母親は木槌の、子供は薬刷毛の付喪神で、イタチの死体に憑いている。

三匹でひとつの妖なので子の刷毛イタチがいなくなったことで多少なりとあった理性がまるっと吹っ飛んで、近くにいた男性——小三郎殿に襲い掛かったそうだ。

「——殺しておかなくて、良かったんですか？」

折れた右腕の手当てを受けながら小三郎殿はそう聞いた。

小刀で響利の手入れをしながら話を聞いていた私は思わず付きたくなった溜め息を飲み込んだ。

華音が眉をしかめてから私を見るのを感じて、響利に目を向けたまま華音の言葉を代弁する。

「殺す事ばかり考えるのは、悲しい」

「！」

「以前華音が言ってた言葉だよ。幸いあなたも命に係わる怪我では

ないし、子を心配する親の気持ちを考えてやってほしい」

それに、と言いかけて口を噤む。

ただ思っただけでも言って良いことと悪いことがある。

真古村まふるむらの人間は妖に困らされることは多いが、その存在を本気で厭っている人間は少ない。

妖による死人が出ないことが一番の理由ではあるだろうが、妖を見ても武器を構える人はいない。

基本的に妖たちは単純だ。

からかってやりたいから悪戯をしよう、構ってほしいから悪戯をしよう。

試合で負けたからある程度は従おう、相手に殺意はないから試合をしよう。

純粹な子供のようなものだ。

ある程度の加減は考えて欲求に忠実だし、強い者には従順で、相手に向けられた気持ちと同じものを返す。

だから——真剣まけんを持っていた彼に、同じだけの武器ぶきを持って返したんじゃないかと思った。

本当のところは解らないが、例え不確かでもこんなことを言ったら彼を傷つける可能性もある。

言わないに越したことはないだろう。

例え彼が私のことを男だと勘違いしていて、嫉妬あつしていて、正直傷つかないように配慮する義理がなくてもである。

手入れを終えた響利を鞘に戻して、私はちらりと華音を見上げた。

何か、気になることがあるような顔をしているが、私と目が合うと緩慢に首を振った。

後で、と唇だけで言ったそれに目で頷き返して、壁に背を付ける。

「えっと、その、この村では皆私の言葉に賛同してくれて……だから、妖と戦っても殺さないで終われそうならそうしてるんです」

「そう、なんですか……優しい方ですね」

思わず失笑しそうになって、顔を背ける。

きつと言ったのが華音でない人だったら“優しい”ではなく“甘い”とか“考えなし”とか言われるに違いない。

優しそうな顔はしているが、この人は狸だ。

鞘に傷がないのを確認してから、私は響刹を胡坐をかけた膝の上に置いた。

手当てが終わった華音は彼から離れて、私の斜め前に座るとほっと息を吐いた。

小三郎殿も少し名残惜しそうな顔をしながらも華音に向かって正座をして向き直る。

「――単刀直入にお聞きます」

凜、と空気が澄むような感じがした。

私が華音がすごいと思うのは類稀な能力でも、美貌でもない。場の空気を支配するその目だ。

「無血の夜叉様が、このような村に何用にございましょう」

それも、おひとりで、と極小さく呟かれた声は静かな部屋の中で掻き消されることもなく響いた。

ふっと息を飲んだ小三郎殿は直後、そっと頭を下げた。

「――お察しの通り、私は無血の夜叉こと畦倉小三郎と申します。
あぜくら

姓を隠匿したこと、どうぞお許しください」

深々と下げられた頭に溜め息を吐きたくなったのは私だけなんだろうか。

また、面倒事が降ってきた――。

第三話 続々・何もかもが始まりの日（後書き）

2011・07・29 地の文、小三郎の呼び方を変更／小三郎の

台詞を変更

2011・07・30 ルビ削除・変更／地の文変更

第四話 続×3・何もかもが始まりの日

無血の夜叉——最近よく聞くようになった武将の通り名である。

若いながらもその智は逸脱していて、戦場での機転は恐ろしく良い。武将なのにも拘らず兵士に策を与え、己は血を滅多に血を浴びないことからその名がついた。

また、その戦い方から武一辺倒の重鎮などからは厭われていて揶揄する意図でつけられた名でもある。

心無い人からは“あぜくら畦倉の血塗れ夜叉”とも呼ばれることもある。

畦倉、というのはこの国では有名な住職の一族のことである。

はのせ羽野瀬寺という国最大の寺院の住職を代々務めている家系で、勿論血を浴びる——人を殺すのはご法度だ。

……普通の人だってそうだが、ここでは特に忌み嫌われる事として受け取ってほしい。

だから、武将として名乗りを上げ、自分の手で人は殺さないとは言っても策を授け、刀を持つ現住職の末息子である彼、こやぶろう畦倉小三郎は半ば勘当されているらしい。

そういう風説的な意味でも、無血の夜叉は有名である。

何せ僻地であるこの真古村まふるまで情報が届くのだから、相当なものだろう。

何故、半ば勘当などという微妙な言い方をしたのか。

それは彼の持つ刀に理由の一端がある。

“るへぎ流碧”、それが彼の持つ刀の名前である。

近年成功した“異能の付属”をより強力にした逸物で、それ故にか

扱いが著しく難しい。

水を使役するそれは神の力を司っていると考えられていて、それを使える畦倉殿は人を殺してはいるのだけれど、神様には認められているのではないかという何とも微妙な立ち位置にいる。

だから“半ば”勘当、畦倉の人たちもどうしたものかと悩んでいるらしい。

……まあ、これも全て所謂いわゆる噂話だから本当かどうかは私の知ったことではない。

重要なのは、そんな彼がここに、この真古村に來たという事実だ。何故ここへ、と聞いた華音かのんに彼は少し考え込むと、胡散臭い笑みをこちらに――正しくは私に向けた。

「先程、華音さんは村長さんの娘御とお聞きしましたが、そちらの方についてはお聞きしておりません。あまり大衆に広める話でもないのですが……」

要は畦倉殿は、“お前に聞かせる話はねえんだよ、しっしっ”と言いたいのだろう。

その真意は解らないが、嫉妬混じりなのは視線の色で何となく解った。

……こんなことにばかり鋭くなって、私は一体何になりたいんだろう。

華音はと言えば私の口が堅いのを知っているし、私自身が言うのもなんだが私のことを一番に信頼してくれている。

だから、彼の言葉に苛つとしたのも手に取るように解った。

一瞬彼女と目が合って、宥めるように苦笑すると、その怒気も霧散したが。

胡坐の上に置いた愛刀を手持無沙汰に転がしながら、私は小さく息を吐いた。

確かに、大衆に広めるべきでない話もあるのだろう。だが、彼は状況と人の感情を正しく読むべきだと思う。

「申し遅れた。私はつばめ——この村で万屋を営んでいるしがない村人だ」

ずっと姿勢を正して、響利きょうせつを傍らに置いて頭を下げる。

とは言え、胡坐をかいているからどう見たって女性ではなく男性に見えるだろうことは自覚済みだ。

華音も解っているが黙認している。

「あなたが仰ったことだが、済まないが席は外せない」

「……何故、とお聞きしても構いませんか？」

「私が席を外して、あなたが華音に狼藉を働かないと確信できない」

……武士にとっては耐え難い侮辱だろうことは解りながらも、私は畦倉殿の目を見つめた。

ぴくりと眉が痙攣したのは見えたが、例え斬られようともこの主張を曲げるつもりはなかった。

片眼鏡の向こうの瞳が怒りを抑えるように一瞬閉ざされて、開いた。

「私が……彼女に乱暴をする、と？」

「その可能性があると思っている」

「——それが、武士に対する、侮辱だと……解って言っているのですか……！」

「勿論だ」

かっと、彼の顔に朱が立ち上った。

刀にかけようとした手をぶるぶると震わせながらも抑え込んだのは天晴な精神力と言えるだろうが、腹芸ができれば武将としても長生きはできないのではないだろうかと思う。

呆れたような顔をした華音が窘めるように視線をこちらに向けるのに肩を竦めて返して、尚彼の目を見つめた。

別に、彼を侮辱したくてこんなことを言っているのではない。

戦慄わななしている彼には申し訳ないが、その片鱗があるからそう言っているのだ。

「会って数刻の人間に、信頼を求めないでほしい。私にはあなたが誠実な武士なのか、そうでないかの判断が付かない。見る目があれば判断できるだろうけれど、生憎人を見る目がない。あなたが本当に誠実なら無礼なことを言っているのだろうが、不実な人間であったとき事が起きてからでは遅い」

「……武士の矜持に傷をつけた、罪は重いかと思いますが？」

「親友を守るのに罪なんて気にしてはいられない。それに——あなたの行動に不審を抱いたからこうして食い下がっているんだ、そう睨まないでくれないか」

怒りで顔を赤くしていた畦倉殿は私の言葉に眉根を寄せた。

彼自身に覚えのないことなのだろうとは思うが、華音に惚れる男には私も多少過敏になる傾向がある。

華音は可愛いし、優しいから、知らない内に相手を煽ることがあるのだ。

それ故に相手がそうしようと思っていなくても狼になる可能性はある。

だから、無自覚といえどその片鱗があるのなら、私だって余計に警戒する。

「私に不審、ですか？」

「聞くが、何故村長に話をしない」

「……と、いうと？」

「この村に用があるのなら、まず村長に話を通すのが普通じゃないのか。にも拘らず村長の血縁というだけでただの村人である華音に一番に話をするのはおかしいだろう」

と、思ったのだけれど、と肩を竦めると華音がふ、と笑った。

細められた目には面白がるような色が混じっていて、この展開を予想していたんだろうな、と思わせた。

まあ……予想していなくても華音なら面白がりそうなものだ。

私がこうやって意欲的に———というか積極的に物事に取り組むのは珍しいことだから。

「村長の娘御ならば次期村長ではありませんか。ただの村人ではないでしょう」

「悪いがこの村では村長は世襲制じゃない。それによしんば彼女が次期村長だったとしても、話をする優先順位は変わらない。もし、それが理由ならあなたは話せないと華音に言うべきじゃないか？」

ぐ、と言葉に詰まった畦倉殿に私は目を眇める。

ただの村人なら言い包められるとでも思っていたんだろうけれど、生憎と粗探しと屁理屈は得意中の得意だ。

……しかしここまで食い下がるってことは無意識でも華音に手を出そうとしていた訳ではない気もする。

それが理由なら少しくらい気まずそうにしたっておかしくないし、——まあ、彼がよっぽどの厚顔無恥でなければ、という前提の上だが——諦めて順当に村長に話をするんじゃないだろうか。

苦虫を噛み潰したような彼の顔を見ながら、私は他の可能性を考え

てみた。

まず、畦倉殿は村長よりも先に華音に話をしようとした。

そして、第三者わたしがいるのは都合が悪い。

大衆に話を広めたくないと言ったが、それも本当であるとは考え難い。

そうまでして華音だけに話をする理由、か。

……そもそもこの人がこの村に来た理由が――。

「……華音に関係しているのか」

「！」

「へ？ えっと、何が？」

「畦倉殿がここに来た理由がだよ。それを華音以外に知られると都合が悪いってことは――そうだね、その用が華音に負担をかけるような事なのか、もしくは華音を連れて行こうとしているか、って所かな」

どちらにせよ、華音と仲のいい私や親である村長に知られてはやり辛くなる事ではあるだろう。

華音自身に留まって考えるのなら、彼女は自分を省みないところもあるし、頭は良いのに言い包められやすい。

だから彼が華音だけに話をしようとしたのは正しい判断だ。

誠実さとは掛け離れてしまったけれど。

苦い顔を隠そうともしない畦倉殿に私は思わず心中で笑ってしまった。

隠し事をするならもっと顔の筋肉を鍛えた方が良い。

そうやって苦い顔をしてしまえば私の推測が当たっているのだと知らせてしまっているようなものだ。

頭が良いとは言っても泥臭い腹の探り合いには不慣れなのかもしれ

ない。

私がそれを得意としているかと言えば、否ではあるのだけれど、それ以上に目の前の彼は向いていないようだ。

多分、相手の腹を探るのは得意なのだろうと思う。

それくらいには頭がいいと思えたし、最初の言動だって自身の溢れるものだったのだから。

だが、探り“合い”となると話は違ってくるようだ。

つまり――彼は自分の感情を隠すのを得手としていない。

私としては解りやすくて万々歳だが。

「そうと解れば尚更私はここを離れられない。――そんな顔をしないでほしいな、畦倉殿。私だって腹に据えかねているんだ」

ふ、と口元だけで嫌味そうに笑うと華音が耐えかねたように小さく吹き出した。

曰く、つばめが珍しく積極的なのに悪役だ、だそうで。

……あのね、華音。

あんた自分の話だって解ってるならもうちょっと緊張感持ちな？

第四話 続×3・何もかもが始まりの日（後書き）

2011・07・30 地の文、表現の変更／つばめの台詞修正

第五話 続×4・何もかもが始まりの日

「――はあ……」

吐いた息が、埃っぽい家の中で響いた。

ここ数日面倒臭がって掃除をしていなかったから、埃が舞っているのがよく見える。

近い内に万屋を休んで家事も片付けなきゃな、とは思うものの、如何せんそれ以上に気にかかることがあった。

日も傾きかけた頃、あぜくら畦倉殿はかのん華音の家から村でたったひとつの宿屋に向かっていた。

結論は待つてほしいと言った華音の言葉に従って、一泊だけすることにしたようだ。

――どちらにせよ、明日の朝には結論を出す。

そう言った華音はいつも通り能天気な顔だったけれど、心中はその限りではなかっただろう。

私は何も言えずに傍にいただけだったけれど、今、華音はひとりで悩んでやしないだろうか。

「……うーん、まあ、なるようになるか」

呟いて背中から布団に倒れこむと、ぼふあつと埃が散った。

顔にかかるそれを払う気にもなれず、目を細めていると、何となく華音のことで悩んでいたのが馬鹿らしくなってきた。

元々私は華音を守るとかそんな大層な事をしたくない訳じゃない。

あの子がしたいようにすれば良いと思ってるし、危ないと思えば心配位はするが華音自身の決めたことならちよつと荒波に揉まれてく

ればいい。

今回の事に弁明するなら、畦倉殿があんまりに胡散臭かったし、華音では勝てないくらいの腕があると思ったから特例だ。

いつもはあそこまで口出ししたりしない、真面目に。

大体にしてこの村の人間は華音に過保護すぎるのだと思う。

他の同年代の男衆のように町まで行って買い出しやら、行商人との商談やら、させてやれば良いのに。

私がやると華音もやりたがるとか何とか言って私まで村に閉じ込めるのも勘弁してほしい。

否、別に町に行きたいとは思っていないのだが、幼い時ならまだしも、今も行動を制限されるのは鬱陶しい。

女なんだから、は理由にならない。

私はそこいらの男なら相手取れると自負しているし、格好も女というには足りない事も解っている。

……何が足りないって色々だ、色々。

唯一女らしいと言われる伸ばした黒髪も、生憎あいにく剛毛で融通が利かない。

別に男になりたいとは言わないが、女なんだから、なんて建前で行動にけちがつくなら髪でも短くしてやろうと何度思ったことか。

村の男に言ったら女捨ててると言われたことは記憶に新しい。

ぼんやりと物思いに耽っていると、軽い、戸を叩く音が聞こえてきた。

ついで、温和そうな声。

それが遠慮するように小さな音量で起きてますか、と囁ささやいた。

まあ、夜も更けてきたし遠慮するのは解るんだが、それなら何でもっと早くに来なかったんだ。

ふうと息を吐いて、私は布団から起き上がった。

「起きてるよ。何か用か？」

「！ 少し、お時間を頂いても宜しいですか？」

私に良い思いはしていないだろうに、礼儀正しいのには流石に良家の片鱗が見える。

この村の男衆なら寝ていようが起きていようがお構いなしに戸を蹴り開けて話につき合わせるのだから雲泥の差と言って良いだろう。ぐるぐると肩を回して袴を正す。

流石にこの埃くさい家の中に彼を入れる気にはなれなかった。

ふありと欠伸を零してがらりと戸を開けると、すぐそこに彼――畦倉殿が立っていた。

「こんばんは」

「……こんばんは」

「悪いけど家の中は駄目。埃臭くてな……」

「いえ。少し手合わせをして下さいませんか？」

彼はそう言う私を見下ろして少し口角を釣り上げた。

その腰には真剣が差されている。

手合わせ、ね。

心中呟いて思わず溜め息を吐く。

うん、面倒だ。

そもそも本当なら私の剣術は剣術と言うのが烏滸がましいくらい滅茶苦茶だ。

というのも基礎は父さんに教えてもらっていたが、他は実戦で培ったものだから流派なんて欠片もない。

自己流だから応用は効くが、隙が多い。

だから私の剣術はあまり見せられる様な物じゃない。

「……つか、右腕折れてんじゃなかったっけ」

「あなたに心配されるような事じゃありませんよ」

……やっぱり敵視されてるなあ。

はあ、と視線をはぐらかすように溜め息を吐いて、目を逸らす。

華音と私の仲が良いから嫉妬。

よくある話だ。

だけど面倒なのは相手がこの村の人間じゃないこと——極論、私が彼の性格を掴み切れていないことだ。

このままだと相手を怒らせないようにのりくらりが正直難しいのだ。

……まあ、つまるところ村の連中相手にはそうやって逃げてたつてことなんだけどね。

思わずふう、と溜め息を吐く。

大体、こいつはどの面下げて私に会いに来てるんだろう。

私があの話に何も感じてないなんて、流石に思っていないよな？
ふっと意識は数刻前に飛んだ。

十

「小三郎様、つばめを信じて頂けませんか？」

華音は、自分が笑って四散した緊張感を取り戻すように殊更ゆつくりと言う。

……悪いけど、まだ顔が笑ってるからあんまり緊張感ないよ。
空気を読んで心の中だけで呟いた私、えらい。

言葉だけは厳かな華音に、畦倉殿は苦い顔のまま私を見た。

「……いえ、その……」

「つばめの口が堅いことは私が保証します。ですから、私を信用していただきたいのです」

それでは、駄目でしょうか。

そう言う華音に、畦倉殿はぶんぶんと首を横に振った。

……華音がすごいのか、畦倉殿が馬鹿なのか、恋した男が馬鹿なのか、悩みどころではある。

それが間接的にでも私の口の堅さを信じるということになるのに気付いたのだろう畦倉殿は一瞬はっとすると、諦めたように肩を落とした。

「……解りました。ただ、ここで話したことは一切他言無用でお願いします」

「はい、勿論です。少なくとも小三郎様が私達を信用して下さいっている間は一切の公言は致しません」

「私は華音に従うよ」

言って、立てた片膝の上に顎を置く。

話は勿論聞くけれど、基本的に口を挟む気はない。

私の決して良いとは言えない態度に、畦倉殿は渋い顔をしたが、華音の言ったことを思い出したのか、何も言う事はなかった。

こういうのを見るとなんだか最初から華音に話して貰えば良かったかもしれないとすら思える。

私の必死な態度よりも華音の一言の方が効力があるんだから怒りや呆れを通り越して笑えてくるから不思議だ。

「私は——いえ、私たちは政府からの命を受けて、この村に“白銀

の巫女”様をお迎えに上がりました」

「！ 白銀の……みこ……」

畦倉殿のその言葉に、華音はきゅっと着物を握った。

“ミコ”、どこかで聞いた言葉だ、と記憶をたどる。

確か——ついさつき深潭しんたんの森で華音が言っていた言葉だったように思う。

白銀というのにも心当たりはある。

華音の髪——今は黒いが、あるとき、数刻だけきらきらと輝く雪の色に変わるのだ。

例え黒い染色剤で染めていてもその数刻の間、髪の色は一気に白銀になる。

しかし、それよりこの武士はなんて言った？

“お迎えに上がった”、だと？

「ええ、白銀の巫女というのは、動物に、植物に、妖に、全てのものに愛される強い法力を持った女性の事を言います」

百年に一人現れるらしいです、と補足のように彼は言った。

畦倉殿曰く、白銀の巫女はある一定量以上法力を使うと髪の色が抜け、透明に近い白の髪になることからそう呼ばれているのだとか。

曰く、十歳前後にお告げを受けて強大な法力を授かるのだとか。

華音自身は“力”を法力とは捉えていなかったけれど、思い当たる節はあるのだ。

しかも私は恐らくその“お告げ”のその時に華音と一緒にいたのだから。

「どうして、この村に？」

「とある筋からの情報でこの真古村まふるは妖あやかしに襲われていないようだ。

村ひとつを覆う結界を作るには白銀の巫女程の法力がなければ不可能ですから。それに前・白銀の巫女が亡くなって百年以上経っているのでもしや、ということらしいです」

「そう、ですか」

続けて、彼は法力について話した。

何でも法力というのは性別によって入る器が違うらしい。

男性はほとんどの人が同じくらいの法力を持つことができる。

村の男衆も、力の使い方さえ解れば小屋を包むくらいの結界を張ったり、細い炎を出したりはできるそうだ。

対して女性はほとんどが零に近いという。

一寸角の結界をひとつ、五秒ほどもたせられれば良いところだとか。だが、極稀に男性をも上回る法力の持ち主がいるのだという。

それが白銀の巫女——その法力は男性のそれを遙かに凌駕する。

男性の法力の平均を仮に五十とすると、女性の平均は零、あるいは一。

それでは白銀の巫女は、と言うと一万、あるいは一億。

上限が見えないので容易く何倍とは言えないという。

「白銀の巫女」様は国で手厚く保護することに決まっております。華音さん……いえ、白銀の巫女様、どうぞ私たちと共に国都まで来て頂けませんか」

「……みつつ、聞かせていただいても、構いませんか？」

「はい、私に答えられることならば」

華音はひとつひとつ言葉を考えるように言って、帰ってきた言葉にありがとうございます、と頭を下げた。

「ひとつは、何故私が白銀の巫女だと思うのか。ひとつは、私が“

保護”された場合、何を求められるのか。ひとつは——その、お一人で来たのではないのなら、他の方々がどこにいらっしゃるのか」

すぐに質問が浮かぶのを見ると、華音の頭の良さがわかる。

それに見た感じだけだとあまり動揺していないように見える。

とはいえ、本当に動揺していない訳でもないだろう。

心の中では慌てふためいているのかもしれないと思うと、少し笑えた。

「順にお答えします。華音さんが白銀の巫女だと解ったのは、私に多少なりと法術の心得があるからです。法力の使い方を覚えた人は感覚的なのですが相對した人間の法力を測ることができるんです」
「……確かに、小三郎さんからは村の男性より威圧感、のようなものを感じます」

「はい、恐らくそれでしょう。次に保護された場合についてですが……国都に結界を張ることが求められるかと思います。現在国都は妖の巣窟になっているので……」

「国都が……？」

「……ええ、死傷者の数も年々増えてきています。最後に、他の仲間について、ですが東の……」

「深潭の森ですか？」

「はい。この山を越えた、ふもとの村で待っています」

「ええと……ここに来なかったのはなぜか、聞いても？」

「はい。白銀の巫女様の張る結界はどうやら血を浴びたもの、不浄なものを寄せ付けないようですね」

「……ええ、まあ。妖だけ、と限定すると賊も村に入ってきてしまうので」

「ですから——私たちは武士です。人の血を浴びているので入れなかったのです。本当なら私も入れなかったのですが、物理的に血を浴びたことが少なかったこと、それから腐っても住職の家系でした

から、自身に清めの術を用いてここまで参りました」

「そうなんですか……」

畦倉殿が話し終えたところで華音が考え始めたので私も目を閉じて思索に耽る。

ひとつめの法力についてだが、もしやそれで私が女だと知られるかもしれないと思ったのだが、そこについての言及はなかったのであらうとする。

もし私の法力が性別の区分通り零に近しかったら、男だと思っている畦倉殿も何か言うかと思ったんだけど、そこまで嫌味でもなかったって事だろうか。

ふたつめの国都に結界を張るという話。

……まあ、まずそれだけでは終わらないだろうな、と思う。

結界を張り終えたら、やれ妖退治だ、やれ他国への防衛だ、と最終的には戦に参加させられるかもしれない。

まあ、それに関しては華音だって解っているようなので言いっこなしだ。

みつつめの結界云々、他の仲間云々については考えるべき点が少ないので保留にしておこう。

ただ、気になるのはもし華音を国都に連れて行くとした場合、深潭の森では誰が華音を守るのか、だ。

畦倉殿の右腕は折れてるし、華音も腕は悪くないのだが男相手には力負けするだろう。

それも少し置いておこう。

——さて、華音が保護されたとして、彼女に利点はあるのかといえれば、正直今のところは皆無に近い。

保護されるってことは安全が保障されるのだろうけれど、国の保護なんてあてになるかは解らない。

今後、もしかしたら他国から使者なんかが来て、華音を連れて行くこととするかもしれないけれど、この国だって白銀の巫女が存在を隠すだろうから、そう早くは来ないだろうと思われる。

結界については多分華音の事だから真古村の結界も残していくだろうから負担にしかない。

利点はほとんどない、だけど、私には確信がある。

華音は、絶対に国都に行く。

第五話 続×4・何もかもの始まりの日（後書き）

2011・08・03	地の文、表現の変更
2011・08・07	地の文、表現の変更

第六話 続×5・何もかもが始まりの日

「——つばめさん？」

私を呼ぶ声に意識が浮上する。

思わず物思いに耽ってしまったけれど、そういえば彼もいたんだっ
たな。

ふるふると首を振って私は目の前に立つ人を見上げた。
何の話してたんだったか——ああ、手合わせ、だっけ。

「えーっと——……手合わせは面倒臭い」

「それで、本当に拒否できると思ってますか？」

全く思っていない。

そもそもそれで引き下がるような人間ならわざわざこんな時間には
来ないだろう。

思わず大きく溜め息を吐く。
面倒だ、果てしなく面倒だ。

「……。そもそも何だっけいきなり手合わせなんだ、明日は国都に
戻るんじゃないのか。それ以上怪我したらどうする気だ」

「！ おや、私が国都に戻るという事は華音かのんさんを連れて行くとい
う事になるんですが、随分あっさりしているんですね」

畦倉あぜくら殿はくすりと笑った。

その顔には愉悦大半と少しの苛立ちが含まれていて、特に後者の意
味が解らなかった。

華音が国都に行くことを前提に考えているから、私に勝ったような
気分になっているのだろうから、喜ぶのは解る。

だが、彼が苛々とする契機になるようなものはなかったように思う。

「――華音は絶対に行くよ」

いらっ。

今、前方から放たれた怒気の意味は解った。

私は華音の事を解っているように言うから嫉妬したんだろう。

もしかしたらさっきの苛立ちも同じ類のものだったのかもしれない、
と思いながらろうじて笑みを浮かべて目の前に立つ畦倉殿と目を
合わせる。

「……何故、解るのですか」

「華音は誰かが傷ついてるって聞いてそっぽを向けるほど、器用じやない」

全てのものを助けようと、守ろうとするような子なんだ。

そういう所が傲慢に見えて癪に障らない訳でもないが、それでもそう
じやなきや華音じゃない。

「――そういう、奴だから」

十

どこか遠くを見るように目を細めたつばめさんは小さく呟いてから、
ふるふると首を振った。

言いたくはないが、華音さんがつばめさんの事を心底信頼している
のは少しの間近くにいただけでよく解った。

だが、先の舌戦と良い、底の知れない笑みと良い、もしかしたら華音さんが騙されているのではないかと思いたくもなるようなものばかりで、何だってこんな人が華音さんの近くにいいのか、不思議でならなかった。

彼は華音さんを陥れようとしているのではないのか。

彼女を大事に思っているようなフリをしているだけではないのか。

だから彼が華音さんが国都に来ることを前提に話し始めたとき、確かな優越感と共に仄かな苛立ちを覚えた。

やはり、華音さんを大事に思っていたわけではないのだと思い込んでいるから。

だが、次に彼が言った言葉は、華音さんを深く理解して見守るようなものだった。

それを聞いてほっとした、もし彼が彼女を騙していたら華音さんは泣いてしまうだろうから。

それと同時に嫉妬もした。

むしろ嫉妬心の方が大きかった。

私だって彼女が優しいことは知っている、と外聞なく言いそうになって口を引き結ぶ。

この男に隙を見せるのは業腹だ。

睨みつけるように彼を見ているとつばめさんは居心地が悪そうに身動きした。

「……兎に角、私は明日妖の蔓延^{はびこ}る山を超える、しかも現在怪我をしている人相手に手合わせをする気はない」

そもそも今手合わせをしようなんて何を考えているんだ、と眉を顰めた彼に私は思わず言葉を詰まらせた。

——彼の言っていることは正しい。

腕は幸い折れてはいなかったものの、力が入らない。

二・三日使わなければ元通り使えるようになるだろうと言われたが、万全の状態ではないのは自分でも解っている。

今、つばめさんと手合わせすれば、負けは確実、怪我也十中八九増えるだろうし、間違っても賢明な判断とは言えない。

私は、彼に嫉妬している。

華音さんから全幅の信頼を置かれている彼に――そして態度でも、その強さでもその信頼に値する人間だと解らされてしまう彼に。

彼がもっと嫌な人間ならば華音さんに言い含めて離れさせることもできただろう。

だが、そうじゃないから余計に嫉妬する。

だから、私と戦って怪我をさせられれば――その信頼をなくせば、思ってしまった。

「（――最低、ですね）」

自分の行動にふと苦笑いが零れた。

それが聞こえたのかつばめさんが訝しげに首を傾げる。

彼は、実年齢は私よりも幼いだろうに、非常に冷静だ。

彼女の近くにあるにもかかわらず、それで驕ることもないその潔さがさらにこの感情を――劣等感を際立たせていた。

今の私では彼に遠く及ばない。

刀の面でも、心の面でも。

受け止めざるを得なかった現実には力の限り手を握り締めると、真正面からため息が聞こえてきた。

――もちろん、つばめさんのものだ。

「あのさ、何考えてんだか知らないけど、あんた華音を守るんじゃないのか？」

呆れたようなその声色に思わず目を瞬く。

驚いて顔を上げると、彼はやっぱりさっきと同じどこかやる気のない、だるそうな顔で私を見ていた。

その目は、呆れたような色を帯びていながらも、あたたかいものを湛えているように見えた。

「え……」

「華音に惚れたんだろ」

惚れた人は守りたいもんじゃないの、と首を傾げる彼に思わずぽかんとする。

それは……その、彼の言う通りではあるのだけれど、そんなにあっけらかんとして言われても……つばめさんは彼女のことを好いている訳では——いや、それが問題ではない。

——彼が守るのでは、ないのだろうか。

「——私で、良いんでしょうか」

ぽつりと呟いた私の声につばめさんは器用に片眉を上げた。

彼女に、心から信頼されている、その信頼に見合うだけの力もあるつばめさんではなく、私で、良いのだろうか。

そんな心情を吐露することなく口を噤めば、沈黙が場を支配した。

「……それさ、どういう意味？」

大いに呆れの色を含んだそんな声が私の耳朵をついた。

「華音を偶像化してるんならそんなの迷惑だ、あの子はただの人間なんだから、そんな妄想捨てちまえ」

——華音さんを偶像化？

いいや、違う。

私が届かないと、高みの人だと思ったのは、つばめさんだ。

「……ただの人でも、届かないと思わされるんです」

力量だけじゃない、彼は華音さんを心から信頼して、信頼されているんだと——そのことに誇りを持っているのだと見せつけられている気になる。

つばめさんにそんな気はないと、私にだって解るが、何だか大きな隔たりを感じる。

これが、偶像化ということなのか？

「思わされるんじゃないだろ」

「……？」

「あんたが勝手に思ってるだけ。あの子はただちょっと優しいだけの普通の女の子だよ、少なくとも中身はね」

外見がどうか、持ってる力がどうかは知らないけど、とつばめさんは口に笑みを刻んだ。

心の底からそう思っているらしい彼の笑みに思わず目を瞬く。

華音さんがただの女の子だと言うのなら、彼は——……。

「……ただの村人ってところですね」

「は？」

「いえ、何でもありませんよ。ただ、華音さんがただの女の子とはずいぶんですね？ 彼女は淑やかで心優しい私の——想い人、です」

ただの、ではありません、と再度言うと、目の前の青年は呆れたように溜め息を吐いた。

——華音さんがただの女の子でなく淑やかで優しい私の想い人だというのなら、彼は、つばめさんは一体何だろう。
タダの村人というには彼は少し私の想い人に近すぎた。
タダの知り合いというには彼は私に近づきすぎた。
タダの相談役というには彼は少し優しすぎた。
タダの——恋敵、というには彼は頓着しなすぎた。
謎はいよいよ極まれり、ひとつ確かなのは彼を“ただの何か”に収まる人間ではないということではないだろうか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3024/>

鍛冶屋の娘

2011年10月20日12時37分発行